頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム
–アジア・アフリカ生存基盤研究のためのグローバルプラットフォーム構築–
報告書

現代アフリカにおける持続型生存基盤としての在来犁農耕の可能性

派遣者　：田中　利和
派遣期間：2014 年 6 月 10 日～2015 年 2 月 2 日　(232 日間)
派遣先　：アジスアベバ大学エチオピア研究所（エチオピア）
　　：SOAS ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（イギリス）

キーワード：犁農耕、牛耕、エチオピア中央高原、オロモ、農耕技術の変容

１．　研究課題について

現代のアフリカは人口増加とそれを賄う食料需用の増大という問題を抱えている。かぎられた土地のなかで、集約的かつ安定した農業の必要に直面していることは間違いない。アフリカの在来集約農業の 1 つとして、エチオピア中央高原に暮らすオロモの人びとが実践してきた、農法的に高度な発達段階にあると理解できる「牛耕」、つまり、ウシを用いた「犁農耕」について検討することは、現代アフリカ農民の持続型生存基盤を考察するうえで重要な課題であると考える。本研究では、人びとの生存基盤としての犁農耕の可能性について、実証的データを用いて総合的に明らかにすることを目的とする。その結果を他の地域での農業実践の事例と比較することで、その特性を理解し、有用性と応用の可能性について検証する。

２．　派遣の内容

2014 年 6 月 10 日から 2014 年 8 月 31 日にかけての 82 日間エチオピアに渡航した。5 月 22 日にアフリカ学会での発表のために一時帰国した。前回に続き犁農耕の実践に関するデータの収集を続けた。調査対象地域の犁農耕の特質を相対化するために、エチオピア国内の生態環境が異なる他の地域をたずね、農業実践に関する観察と聞き取り、そして農民との議論をおこなった。2015 年 2 月におこなわれる最終ワークショップの招聘者を選定するために、関係する研

究機関等をたずねまわった。招聘者を調査地に招き、地域の犁農耕に関する特質について農民を交えて議論をおこなった。

2014 年 9 月 1 日から 2015 年の 2 月 2 日の 154 日間は、イギリスのロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）に在籍し、アフリカの農業とエチオピア研究に関する資料の収集、関連分野の研究者との交流をおこなった。2015 年 2 月の国際ワークショップへ招聘する研究者を同国内から選定し、来日の交渉をすることも課題であった。

３．　派遣中の印象に残った経験や体験

調査地の犁農耕の特質を把握するための広域調査では、調査地（標高 2000m）から直線距離にしておよそ 50 キロ北に位置し、標高が 1000 メートルあがったウォンチ市アルバーサ村を訪問した。山岳地に位置するこの村では、急斜面の農地が多く、堀棒での耕起が主体で牛耕が全く行われていなかった。しかし、馬による穀物の輸送が頻繁におこなわれていることを観察し、畜力の多面的な活用という分析視点を得られたことは大きな収穫であった。

国際ワークショップに招聘する予定のエチオピア人研究者タマスゲン博士を調査地に招き、農民を交えて、当該地域の農耕の特質について議論した。あわせて、国際ワークショップの構想についても意見を交換した。エチオピア犁農耕の起源地とされる北部アムハラ地域出身の博士と農民との議論のなかで、当該地域の農耕の特徴として、犁に加えて、堀棒で耕起されるエンセーテとチャットの栽培が有機的に結合している点が特徴としてあげられた。特に家畜の糞がエンセーテやチャット畑に還元されている点について、北部エチオピアとは異なる犁農耕の性質をもちあわせていることが指摘、評価され、農民の実践を高く評価することを通じて、相互理解を深めていく博士のふるまいは強く印象に残った。

イギリスへの派遣では、アフリカでの畜力利用の研究に造詣が深い、ケンブリッジ在住の開発人類学者のロジャー・ブランチ博士をたずね、京都で開催する国際ワークショップへの来日の交渉をした。ケンブリッジ大学出身のロジャー博士は、学内を半日かけて案内してくれた。同大学の研究の蓄積の量と質、歴史を肌で感じるなかで、派遣者の畜力利用研究に関する厳しくも適切なコメントをもらった経験は、自身の研究の可能性を再認識させられるものとなった。来日交渉をおこない、国際ワークショップの構想をともに議論できたことは、

初めての国際会議のセッションを組むうえで大きな自信となった。

派遣先であるロンドン大学 SOAS では、調査対象地域のオロモの人びとによる、オロモ協会がちょうど発足したところで、その草創メンバーのひとりとして活動させてもらったことが印象に残っている。協会主催のワークショップを企画し、そこで発表させてもらえる機会があったこと、ロンドンのオロモ関係メディアに取材をうけたことは、オロモの人びとを今後研究していくうえでも、とても貴重な経験となった。また、英国開発学勉強会（IDDP）で発表し、イギリス在住の開発学徒からおおくのコメントを得られたことは、今後の研究をつづけていくうえでの大きな経験となった。

４．　目的の達成度や反省点

今回のエチオピア、イギリスへの派遣では、2 月におこなわれる最終国際ワークショップの両国からの招聘者に来日の約束をとりつけることができた。初期の目的は達成できたと考えている。

エチオピア滞在は、短期間ではあったが、広域調査や研究者をフィールドにも招くことができ、最終ワークショップの構成について、フィールドで、農民も含めて議論することができたので、かなりの程度において成功したと思っている。しかし、調査研究と研究者との交流を十分に両立できたとは言いがたく、同時に並行して重要な事項を処理していく能力を高める必要性を感じた。

イギリスの滞在では、新たな環境に適応するのに予想していたよりも時間がかかった。イギリス在住の研究者との交流、SOAS をはじめ関係研究機関における文献調査も十分にはかどったとはいえない。これらの経験をふまえて、今後は適切なタイミングでアポイントメントをとりつけたり、余裕をもって文献調査の時間を用意するなど、タイムマネジメントの技能を身につけていく必要性を感じた。

５．　今後の派遣における課題と目標

今回の派遣で、最終ワークショップのセッション構成に関する準備はほぼ終了した。これまでの渡航で、招聘者と個別に連絡をとりながら、アフリカにおける生存基盤としての犁農耕の可能性という課題について、最終ワークショップで討論できるようにうちあわせをおこなってきた。しかし、コメンテーターをお願いした、神戸大学農学部の庄司浩一先生を含め、4 人のセッション構成者

が顔をあわせるのは、ワークショップ当日のみとなる。どのような、議論が想定されるか、コーディネーターであり、中心的役割を果たす派遣者が、構成者同士の研究内容を活かした創発的な議論ができるように、セッションの趣旨やプログラムの構成について、残された時間でさらに深めていきたいと考えている。

また次回の国際ワークショップのセッションを通じて、研究をさらに深化させるべく、課題を浮き彫りにし、今後のテーマとしてとりくんでいくことも目標の一つとしたい。

写真１：広域調査で訪問した標高 3000 メートルのアルバーサ村の人びとと

写真２：SOAS オロモ協会の発足イベントに参加した派遣者

写真３：ロンドンでおこなわれた、英国開発学勉強会(IDDP)での発表の様子